

Title	編集後記
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.291- 291
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0295

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本号は都市社会学の誕生 100 年を記念する特集号である。社会学の特集号が『哲学』と銘打った雑誌でなされることは、けっして不思議ではない。日本では社会学専攻は哲学科から独立したところが多い。しかし学生諸君には、どことなく違和感があるかもしれない。社会学専攻の立場からすると、社会学は哲学でないから社会学なのであって、社会学は哲学とは別のところに、研究の独自性があるはずだとの主張である。しかしだからといって、あなたの研究には「哲学」がないといわれ、それを喜ぶ社会学者は少ないだろう。

社会学の研究は近年、急速にその姿を変えつつある。社会学の研究は社会生活のあらゆる項目に広がっている。その結果、社会学のほとんどの分野は他の学問の領域と重なってしまっている。したがって、社会学は他の学問分野の社会研究とどのように違うのだろうか。その区分を研究の内容から行うことは難しい。社会学者を社会学者として自覚させているのは、大学での卒業学科、学会の所属などでしかなくなっている。

社会学は研究方法があいまいだといわ

れてきた。しかしそのことが、かえって社会学研究の現実問題への柔軟な対応を可能とすることとなり、社会学への期待が高まることとなった。その一方で、社会学研究のテーマの多くは社会の変化にともなって、徐々に教室で教えられるものではなく、現場で体験するものとなってきている。かつて社会学は「社会学者の数」だけあるといわれた。しかし今日では、社会学の研究は「社会人の数」だけあるような状態になっている。

その意味では、今回の特集は『哲学』の名にふさわしく都市社会学の原点の確認の意味をもっている。とはいえ、その原点は、最近の社会学像の急激な変化を反映して、これまでとは大きく違ったものとなっている。本書では都市の社会学的研究を R. E. パーク以前に遡り、その源流をシカゴからエディンバラやロンドンでの研究に求めることとなった。P. ゲデスの都市論に都市社会学の誕生をもとめる見解の成否については、今後の議論を待つしかないが、現在、急速に変貌を遂げている社会学の研究に、新たな議論を展開する契機となればと期待している。
(藤田弘夫)